

<研究ノート>

大念仏と民間念仏の系譜

坂本 要*

Nenbutsu (Buddhist Prayer) Ceremonies in a Folk Society

Kaname SAKAMOTO *

はじめに

著者は長年にわたって民間念仏をテーマにして研究活動を行ってきた。すでに巻末一覧のような報告・論考を発表しているが、まだ部分発表のため、全体を明らかにしていない。構想の上ではすでに構築されているが、どの部分が明らかになって、どの部分が未解決なのかを、提示する必要に迫られている。従来の研究の到達点と著者の行ってきた研究の接合をはかり研究の全体の方向を探るのが本稿の目的で、研究概要と問題点を洗い直した。

1. 念仏とは

狭義には南無阿弥陀と阿弥陀の名を唱える称名念仏のことをさすが、民間では真言や経文、和讃を唱えることも含めて仏になにか唱えることを念仏としている。

念仏の原義は梵語の *buddhānusmṛti* の漢訳語で仏を憶念する、思念するの意味である。

初期仏教においては心を集中して仏・法・僧・戒・施・天の六つを思念する六念という修業法のひとつであった。大乘仏教の「般舟三昧経」や「観仏三昧海経」になると具体的

には仏の姿、相貌をひとつひとつ思い描くという、見仏の方法とされ、観想念仏といわれた。この思想は往生の思想とも結びつき仏を念ずることによって往生できるとする「観無量寿経」の経典になっていく。中国に仏教が入ると浄土の様相を冥想して描く観法のひとつとして念仏は広まり、浄土教により仏は一尊阿弥陀仏のみとされる。さらに難行に対する易行として阿弥陀の名のみ唱えればよいとする称名念仏、さらにそれを頭に思うのではなく口から声を出して唱える口称念仏が善導により広められた。

日本でも最初に入ってきた念仏は最澄のもたらした天台宗の「摩訶止観」に説く止観・観想の念仏であった。しかしその後円仁により中国五台山より法照の始めた五会念仏が伝えられた。これは善導の口称念仏を音楽化したもので、比叡山の常行三昧堂で不断念仏として行なわれた。十世紀より源信などの影響により貴族の間ひろまった念仏はこの不断念仏である。次に平安末に良忍上人は京都大原に来迎院を開き大原流声明を開くとともに、融通念仏を説いた。これは一人の念仏が万人の念仏の為になるというもので、念仏は融通しあって百万遍にもなる。多くの人が集まっ

* 経営情報学部経営情報学科、Tsukuba Gakuin University

て唱える念仏が民間に流布し、寺僧の念仏とは別に民間の念仏が形成されていった^(注1)。

以上これはいくつかの民俗学辞典の念仏の項目に著者が記した骨子である。念仏としては五会念仏・引声念仏・融通念仏の名があるが、それ以外にも声明や講式で唱える念仏がある。さらに溯るとこれらの声明はヴェーダの声を長く伸ばす唱え方に淵源する。ヴェーダの中には唱え言を細かく繰り返されるジャバという唱え方もある。念仏にも南無阿弥陀仏を長く引き伸ばす引声と細かく繰り返す百万遍のような唱えの二つがある。

2. 民間念仏の定義

民間念仏の定義は僧侶が主催しない在俗の人でのみ行う念仏を想定したものである。現今の民俗では葬式や諸仏の縁日に念仏講がおこなわれ、地念仏・堂念仏・家念仏という。僧侶が主催しないのみか僧侶のいる寺で行っても僧侶は顔出ししない所が多い。もしくは僧侶の読経が終わってから唱える。歴史的に見て念仏講の結成や伝播には半僧半俗の聖や堂守りの僧が考えられるが、現今では各宗派に属する寺僧の儀と別になっている。

ここでは「民間念仏」とは寺僧の関与しない念仏として定義したい。念仏講に寺僧が関与しないことは江戸時代の初めに禁令として出されて定着した。寛文5(1665)年11月に「念仏講、題目講と唱へ、緇素(玄人と素人・僧と民間人)集会することあるべからず」<『徳川実紀三十一巻』>という法度が出され、この時点で僧の民間の講への関与は禁じられてしまった。結果念仏講等への僧に関与はなくなった^(注2)。

一方、五来重は氏の念仏論の初論文として「民俗的念仏の系譜」を発表し、「民俗的念仏」の語を使用し、併せて定義をしている。それによると「ここに民俗的念仏というのはごく一部の宗派を除いては、教理のいかに

かわらず、仏教宗派を通じて仏教徒のあいだに民俗行事(とくに年中行事または社会儀礼)として現に行われている念仏をさすのである。したがってそれは、純粋な念仏信仰としての源空—親鸞の専修念仏とは本質的に対立するもので、教学や思弁に媒介されぬ古代的な呪術的念仏といえる。」とある。つづいての説明では空也—良忍—一遍の念仏を理性的・思弁的・内観的な専修念仏とは「まったく異質な念仏であって、非理性的・呪術的・集団的な性格をもって」おり、日本民族固有の精神構造・宗教観念と社会構造が底流としてある、としている。民俗的念仏の系譜に空也・良忍・一遍の念仏をつなげる考えである。この論で使用されている語によれば「地下茎のごとき底流」としての民俗の精神構造・宗教観念が空也・良忍・一遍の念仏を生み出すという、氏が以降の念仏論の最期まで持ち続けていた考えである。

このような理念として想定された民俗的念仏が、現実の歴史の上でどのように変遷を遂げたのかは具体論で講じられるが、それらが日本民族固有の精神構造・宗教観念に依拠するかどうかまで断言できない。習合しながらも複雑な展開を示している。日本の念仏という独自性で説明できる。空也・良忍・一遍の念仏はその深化により身体性・共同性を獲得して、その結果が民俗につながるという方向も考えられるからである^(注3)。

3. 百万遍念仏

まず民間の念仏講で一般的な百万遍の数珠繰り念仏を考えてみよう。

百万遍は百万回念仏を唱える行法である。念珠の数珠繰りを伴うもの、多くの人とともに大きな数珠を繰るものがある。一般に百万遍という後ものをさす。念仏は中国浄土教の興隆にともない称名・口称の易行として展開したが、祈願、呪願にあっては、多念の

念仏の難行を行なうことにあった。典拠は「木櫛子経」によるが、広めたのは道綽といわれている。また「阿弥陀経（阿弥陀小経）」に七日間不眠不休で百万遍唱えるという七日念仏という行があった。源信もこの百万遍を「往生要集」に引用している。唱えるのは阿弥陀大呪すなわち阿弥陀の陀羅尼であった。呪願的意味が強かった。

『拾遺往生伝』によると康和元年（1099）に天王寺で九日間に百万遍の念仏を唱えたとある^{（注4）}。融通念仏の概念ができる以前の話である。「融通念仏縁起絵」によると良忍が夢の中で阿弥陀仏より融通念仏を示誨されたのは良忍46歳の永久5年（1117）こととされている。百万遍の念仏が先にあり、一人と万人が融通して億百万遍の念仏を唱えるという概念もしくは唱え方はその後に来たことになる。

阿弥陀の名号を唱えて数珠を繰るのは南北朝の元弘年間（1331～34）知恩寺の善阿空円からといわれる。善阿は後醍醐天皇の命により疫病退散の百万遍を行い、効あって寺号を百万遍とした。現在の京都百万遍知恩寺である。また、数え方も十人で十万遍、百人で一万遍というように数を総計で数えるもので、これを略法早修という。

融通念仏の百万遍がどのような唱えであったかは、判明していない。現行の数珠繰りを伴う百万遍では、始め引声のようなゆっくりした唱えからだんだん早く唱える唱え方があり、一概に百万遍を繰り言のように早くとなえるものだと断定できない。

4. 融通念仏と講仏教

融通念仏が念仏結社である講を結成し、民間念仏を始めたと思定できる。現在融通念仏の研究は融通念仏と融通念仏宗を分けることから始まっている。融通念仏の研究者である稲城信子氏は「融通念仏宗と呼ばれる宗派は、

17世紀以降、大念仏寺を中心として、摂津・河内・奈良で行われていた融通念仏の講や寺庵・講中を組織化していった宗派である。それらは近世では「大念仏」と呼ばれたが、正式に融通念仏宗と認められたのは明治7年（1874）のことである。」としている^{（注5）}。

融通念仏の語は良忍没（長承元年・1132）後10年を経ず書かれた『後拾遺往生伝』巻中の「上人良忍」の記事に「夢上人告曰。我倍本意。生上品上生。是融通念仏力也」とあるのが初見である。融通念仏は良忍が1117年（永久5年）三昧中に阿弥陀仏から「一人一切人、一切人一人、一行一切行、一切行一行、是名他力往生、十界一念、融通念仏、億百万遍、功德円満」の偈を授かった事に由来する。意味は世界のすべてが相互に関係して一人が一切の人を表し、一切の人が一人に収斂する。すべての行為は一つの行為に、一つの行為は一切の行為に通じる。したがって十界は一念にある、百万遍の念仏も融通して唱えよ、そうすれば功德は円満する。このような理念にしたがって、多くの人が何度も唱える念仏が融通念仏である。しかしこの話は正和3年（1314）に書かれたとされる「融通念仏縁起絵」に記載され、七世良鎮によって流布されたとする。実際は元享元年（1321）融通念仏中興の祖八世良尊法明上人によるとする説が強い。実は融通念仏は五世尊永以降150年間法系が途絶えてしまう。この間法系はないものの道御が嵯峨野清涼寺で大念仏を行ったり、円覚が壬生寺で大念仏を行ったりすることがあり、これが融通念仏ではないかとされている^{（注6）}。大念仏と融通念仏のことは後述するが、現在の大阪平野の大念仏寺の語の初見は寛文4年（1664）とされる。最近初期の大念仏寺である諸仏護念寺については明らかになってきているが^{（注7）}、融通念仏宗の語は元禄2年が初見である^{（注8）}。

融通念仏宗では良忍（1072～1132）法明（1279～1321）大通（1649～1716）を三祖

とするが良忍から法明・法明から大通の間の実態は不明な部分が多く、元禄年間になって大通が寺院法度に対応すべく、体裁を整え、教線の拡張をはかって初めて宗派らしい形態をとったといえる。それ以前にあつては浄土系の聖や篤信者が講を組み、それらが主体となって「融通念仏」を行ったのが実態ではないかと思われる。筆者も知多半島にある「虫供養大念仏」の調査^(注9)から近世初頭に起こった聖の念仏が惣村形成の過程で村落を超えて巡回する大念仏になっていくことを述べたが、同様の念仏は各地で起こっていたと思われる。村落の寺院の多くが江戸時代初期に発生し、それが幕府の檀家制度と相まって近世の村落仏教が成立するが、それ以前は結衆された講を中心とした講仏教ともいえる形態で発展したのが融通念仏であったと推定できよう。

5. 大念仏と融通念仏

大念仏の語はまだ確定していない。大念仏は融通念仏なのか。

稲城信子氏によると大念仏の語は990年(正暦元年)から1114年(永久2年)まで奈良にあったという「超昇寺大念仏」に見える。これは良忍以前の語で融通念仏とはまだいわれなかった。大念仏は大規模な念仏法会の意味で用いられたのであろうか。大念仏はこのように大規模な念仏という意味で一般名詞としてははじめは使用されたものと思われる。

しかし融通念仏のように大勢で唱える念仏行為のことを大念仏とし、六齋念仏以前に高野山等でおこなわれた高声で唱える念仏・鉦を叩く念仏・踊りをともなう念仏等雑行の念仏も大念仏とした。これは融通念仏の変化したものである^(注10)。

良忍以降文献には「大念仏」「融通念仏」「百万遍」の語がみられ、いずれも「融通念仏」にあたとされる。大勢で唱える大念仏が「融

通念仏」であり、それに加わったものは帳面に記すことをした。道御や円覚の大念仏も融通念仏と考えられ、江戸時代まで融通念仏を行うことは大念仏と記された。

最近和歌山県教育委員会から『高野山麓の六齋念仏』が出され、県下の悉皆報告がなされ全体把握が可能になった。この報告を受けて調査にあたった蘇理剛志氏は「高野山麓の六齋念仏」^(注11)の中で最近の成果をまとめている。

その中で高野山麓に残る六齋念仏発生直前の石造遺物にさざまれた大念仏碑について述べている。それによると1358年(正平13年)橋本市神野々墓地の五輪塔の「大念仏一結衆」を筆頭に、大念仏結衆碑が14世紀から15世紀にかけて六齋念仏に先行するようにあらわれ、1447年(文安4年)の六齋念仏供養碑に続く。これは便阿弥という聖によって立てられたものであるが、その後六齋の結衆碑等が20基ほど見つかっている。これは大念仏も六齋念仏も講形式の結衆によって村落で行われたことを示すものである。

現今の民俗芸能に見る大念仏は踊りをともなった風流系念仏踊りのことをさすものが多い。一般名詞の大掛かりな念仏の意味で用いられているとみられるが、よく見ると風流念仏踊りの前に引声系の念仏があり、融通大念仏の痕跡があり、大念仏とは融通念仏のことをさし、それを含む芸能が大念仏ではないかと考えられる。

具体例をあげると、知多半島の虫供養大念仏がそうで、現在浄土真宗の現世利益和讃が唱えられる他、禅宗の日用勤行經典、修験經典他多様な唱えが入っているが、半田市に広がる四遍念仏のように融通念仏から変化した六齋念仏が入っている。伊勢志摩の大念仏も初めに大念仏という年寄りの大念仏に風流系の太鼓踊りが付随したものと考えられる。三信遠の国境をはさんでひろがる大念仏もハネコミ・放下等いくつかの系統にわかれるが、

いずれも詠唱する念仏を行ってから、踊りに入る。このように多くの念仏踊りは「念仏＋踊り」という構成になっており、この念仏にあたる部分が融通念仏に淵源するのではないかと考えられる。

明確な例は富士山麓にひろがる大念仏で六齋の名もあることから富士六齋と名付けた。この念仏には「融通念仏ナムアマダ」の語が入っている。山中湖の平野が有名であったが、同様の念仏は30か所ほどある。東北の鬼剣舞も平泉のようにしっかりと念仏をとなえてから剣舞に入る。このように念仏踊りといわれる芸能にも、大念仏を唱えることが入っていると見える。

では融通念仏・大念仏はどのような唱え方をしたのであろうか^(注12)。

日本の念仏儀礼は前述のように、円仁により中国五台山の五会念仏という引声念仏伝えられ、比叡山の常行三昧堂で不断念仏として行なわれた。この念仏は十世紀より源信などの影響により貴族の間ひろまった。次に平安末に良忍上人は京都大原に来迎院を開き大原流声明を開くとともに、融通念仏を説いた。大原で教えたのは声明の引声念仏であるが、融通念仏がどのような念仏であったかは不明である。引声で百万遍は不可能に近い。

現存する融通念仏宗で日課となっている如法念仏は引声系の長く引き伸ばす念仏で御回在の末寺で行うときは伏せ鉦二丁を同時に叩きながら唱える。前述の民間の百万遍はさまざまであるが、始めはゆっくりでだんだん早く念仏を唱えるところが多い。融通念仏の記事には「同音」に唱えるという語がたびたび登場する。一斉に唱える念仏を「同音」としていると思えるが、民間念仏には相互に掛け合うように唱える「掛け念仏」が多く見られる。六齋では音頭取りの調声(ちょうしょう)とその他の側(がわ)といわれる掛け合いになっている部分がある。概して民間で行われる念仏は掛け念仏のように、二手に分かれて

唱えあうようなものが増えていったとみられる。

6. 六齋念仏

齋日とは戒律を守り、心身を清浄にする日。僧尼に飲食供養(おんじきくよう)をする日とされた。齋日は月6回あり、六齋日として念仏を唱えたりした。六齋日は月の8日・14日・15日・23日・29日・30日の持齋沐浴し身体清浄にしている日であった。異説もあるが新月・満月と半月の日でひろく祭り日・モノ日とされた日であった。

六齋念仏は毎月六回の持齋日に行なわれた念仏で唱えを中心にした地味なものであるが、京都周辺では踊りをともなって芸能化した。平安時代末に大原の良忍上人が融通念仏を唱え、大念仏として民間にひろまったが、歌舞がそれに付随するようになった。六齋念仏はこのような大念仏や踊り念仏の反動とした起こった持齋の念仏で引声念仏の流れをひく、南無阿弥陀仏を長々と伸ばす念仏であった。四返、白米等の曲があり、高野山系の六齋念仏が元である。六齋の曲調は各地の大念仏、太鼓踊りのような風流化した念仏の中にも断片的に残っている。京都では干葉山光福寺と空也堂が六齋の許可状をだしていた。京都市周辺には詠唱六齋と踊りを伴う芸能六齋があったが、現在は芸能六齋がほとんどである。八月に行なわれる。若狭には古い六齋が残るが京都の芸能六齋の影響がある。京都から離れるが長崎の平戸、壱岐島・五島列島にも残る。キリスト教の禁教令に対する処置として六齋念仏の普及に当たったといわれる。さらに山梨県と静岡県富士山周辺には、祈禱六齋といって修験の儀礼入った念仏が春先にある。道場には切り紙の天蓋をかざり、融通念仏の曲調が入っているのが特徴である。三河の神楽・花祭りの影響を受けている。

以上が筆者の書いた辞書的な説明である

が、高野山系の六齋念仏については五来重の詳細な論があり、それを越えるものは見当たらない。融通念仏・大念仏の研究に比してかなり明確に把握されているといえよう。

筆者の場合その展開として若狭・平戸・富士山周辺の事例を追ったものである。その過程で六齋念仏を唱える時に奇妙な座り方をする例をあげている。若狭で見た例は円陣になってしゃがんで念仏を唱える。平戸島の北にある的山大島では墓場で足を投げ出すようにしてすわる。これは高野山周辺の六齋碑に見られる居念仏にあたるものと思われるが、座ることに特別な意味があるとみられる。居念仏立ち念仏は高野山系六齋に見られるもので、立ち念仏が若者で見習い、居念仏は年寄の本念仏とされる。念仏はすわるものとの観念が地方に伝播した結果であろうか。他にも知多半島の六佐念仏・千葉の六座念仏等六齋の語の変形とみられる念仏がある。

六齋念仏は引声系の念仏であるが、その起源系譜が未解決で、五来重も寺僧の行っていた声明の念仏とは異なる民間念仏起源説をとる一方、天台声明の八句念仏・甲念仏・九品念仏からの連続も示唆している。

また高野山に発した六齋念仏も奈良県に入ると、融通念仏宗や浄土宗の村落に広まっており矢田寺が許可状を出している^(注13)。曲種や太鼓の混入等二次的な変化や六齋念仏の許可制度を考慮しないと現今の六齋につながらない点がある。

7. 双盤念仏

双盤念仏は直径50センチほどの鉦を叩きながら、引声念仏を唱える浄土宗特有の念仏で、古く比叡山常行堂の引声念仏の系譜を引く。京都真如堂の十夜縁起によると、十夜法要でこの引声念仏が唱えられ各地の浄土宗寺院に普及したと見られる。現在真如堂では十月の僧による声明の引声念仏と11月の鉦講による

双盤の十夜念仏の二つがある。双盤は僧侶の行う双盤と在俗の講や連中による双盤がある。僧のものは二枚鉦で、二枚鉦で叩くので双盤という説もある。在俗の人が叩くのは関西では鉦講・関東では双盤連中という4枚鉦から8枚鉦を使う。僧のものは九州から北海道まであり、西山派・名越派・大日比派では独特の双盤念仏がある。関東では鎌倉光明寺に引声念仏が伝わり神奈川県を中心に広まっている。十夜法要の時に叩かれる事が多いが彼岸や正月16日の閻魔の日にも叩かれる。曲は30分ほどで、前半の座付き・六字という引声系の念仏の部分と後半の七五三・雷落とし等の鉦の乱打をとまなう部分から成り立つ。十夜法要にはヤクガネという特別の叩き方をする。

双盤念仏について研究者が少なく関東地区については筆者と小峰孝男が、関西では福持昌之^(注14)が進めている。

双盤念仏の発生については未解明な部分が多いが、五来重が「融通念仏・大念仏および六齋念仏」と「真如堂十夜念仏と十日夜」の中で鉦講として触れている。あまり明確な論ではないが、鉦講が引声系の念仏と鉦のみを叩く部分に分かれており、前者は六齋念仏の真光呂(しんころ)から派生したのではないかとしている。私見になるがわずかに残っている録音できく六齋のシンコロのチャンチャンという叩き方は京都の芸能六齋に似ている。双盤は大きな鉦をたたくのでガーンガーンというゆっくり叩くのが基本である。

真如堂の引声念仏と鉦講の双盤念仏は日時も別の行事であるが、鎌倉光明寺では十夜法要の中で連続して行われる。ただし双盤念仏に当たる六字詰め念仏は雲版を叩き、民間人が行う。双盤を使う念仏は元禄前後に浄土宗の儀軌として成立し、それが民間に普及したとみられる。それ以前に六齋や民間念仏の影響があったことは可能性として否定できないが、一度浄土宗の儀軌として吸い上げられ

たものが再度民間に下降したとみられる。

また西山派の白木念仏・東北から北海道にかけて教線を延ばした名越派の双盤念仏・山口県の大日比派の双盤念仏等の浄土宗諸派に異なる双盤念仏があり各地の寺僧が担っている^(注15)。

8. 念仏踊り

踊り念仏から念仏踊りへの移行は五来重の大きなテーマであった。踊り念仏都は空也・一遍の踊りに代表されるが、底流としては各時代の聖の行状にあったとみている。事実融通念仏縁起絵に融通念仏の徒が踊っている図もある。念仏踊りはそれらが芸能化し民間で行われる民俗芸能の中に見られる。簡単に延べるとこのような論である。五来氏それに続く大森恵子氏の研究が進められた。具体的には放下・暮露という放浪芸人を媒介にして風流化した念仏踊りが形成されたとする^(注16)。

筆者の場合現行の民俗芸能に見られる念仏踊りから出発して、まだ踊り念仏の検討には至っていない。一応現行の念仏踊り、風流踊りから派生したと思われるいわゆる念仏踊りを分析した^(注17)。この風流系念仏踊りの構成と所作を見ていくと踊りを伴わない詠唱念仏と風流踊りの二部構成になっていて、踊る時に「南無阿弥陀仏」の念仏を唱えるものはまれである。詠唱念仏は融通念仏の系統を引く大念仏で、踊りは風流踊りの輪踊りであるというのが、現在の結論である。

9. 傘ブクと盆踊り

風流系念仏踊りから盆踊りが成立してくる。現在盆踊りについては資料の収集中であるが、口説き系の盆踊りには音頭が傘（緋傘・唐笠・破れ傘）をさして唄う所が見受けられる。風流系念仏踊りに傘ブクを囃しながら

ら送る習俗がある。傘ブクはもともと祭礼の依り代としての傘と鉾が習合したもので、15世紀の祇園祭礼図に出ている。カサボコがなまって傘ブクという。その傘ブクに吊り下げ物を下げたものも見られる。志摩半島の大念仏では盆に亡くなった人の遺品を傘ブクに下げて念仏を唱える。岩手県遠野市の喜清寺や大槌町吉里吉里の吉祥寺では死んだ子供の衣服を傘に吊り下げて寺に納める。傘ブクはもともと囃しものとして祭礼や行事に登場したものが新仏の送りの大念仏にも出ているということである。他にも小正月や安産子育て等の諸祈願にも傘ブクは出てくる。送り・払いが祈願に転じて全国にひろまったものと見られる。現在このように小正月・盆・祭礼・雛祭りに出てくる傘ブクや、それに伴う吊り下げ物の全国分布と比較を進めている^(注18)。

まとめ

民間念仏の流れを通観してみると、大念仏と称された融通念仏を中心に展開しているのがわかる。百万遍念仏を唱えるという考えは融通念仏以前にあったが、融通念仏の観念ができるとその念仏の唱え方として数珠繰りを伴ってひろまった。融通念仏は組織的に広まったものではなく、一つの念仏の形態として大念仏といわれて行われ、貴賤を問わずにひろまったようである。融通念仏は戦国時代以降惣村の成立によって、講組織を組み結衆をつのるような民間の念仏になり、各地に大念仏の碑を残している。一方信仰の高まりから持斎運動に展開し、六斎念仏が誕生する。また近世初頭に爆発的に広まった風流踊りと結合して念仏に踊りが加わるようになる。この中で唱えられる踊りをともなわない念仏も大念仏という融通念仏や六斎念仏の系譜を引いたものとみられる。以上がわかった範囲である。

注

- (注1) 坂本 要「念仏」1999『日本民俗学大事典』吉川弘文館2009「念仏」『祭り芸能大事典』朝倉書店
- (注2) 圭室文雄 1971『江戸幕府の宗教統制』評論社 p97。『徳川実紀』寛文5年11月の記事は『大成令』からの引用である。
また現在では布教に熱心な僧が積極的に関与している寺もある。その場合各宗派の御詠歌・和讃が入ることが多い。
- (注3) 坂本 要 1992「念仏=呪術論再考」2008『日本的念仏の三円構造』を参照。
風流系念仏踊りや大念仏といわれる念仏芸能が念仏と踊りに分けられている構成を持つが、念仏には供養という意味が強い。
2004「若狭の六斎と念仏」2011「三信遠大念仏の構成と所作」2013「伊勢・志摩大念仏と傘ブク」
- (注4) 奥野義雄 1988「百万遍念仏稱唱から百万遍念仏数珠繰へ」『奈良県立民俗博物館研究紀要』No.2 奈良県立民俗博物館
- (注5) 稲城信子 2004「大和における融通念仏宗の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』No.112国立歴史民俗博物館
1983「融通念仏信仰の展開」『法会（御回在）の調査研究報告書』元興寺文化財研究所
1988「中世末から近世における融通念仏信仰の展開」『近世仏教』No.21近世仏教研究会
- (注6) 大澤研一 1992「融通念仏の六別寺について」『研究紀要』24 大阪市立博物館 1992
- (注7) 西岡芳文 2010「融通念仏宗の草創に関する新資料」『金澤文庫研究』324 神奈川県立金沢文庫
- (注8) 大澤研一 1996「融通念仏宗研究成立過程の研究における一視点」『研究紀要』28 大阪市立博物館
- (注9) 坂本 要 1997・2000・2012「知多半島の虫供養大念仏と真宗和讃」(1)～(3)
- (注10) 五来 重 1957「融通念仏・大念仏および六斎念仏」

(注11) 蘇理剛志 2010「高野山麓の六斎念仏－その分布と特色を中心に－」『和歌山地方史研究』No.58和歌山地方史研究会

(注12) 五來說では融通念仏は大勢でリズムカルに斉唱する歌声運動のようなものであったとしている。現行の念仏では富士六斎の中にある融通念仏はその感を伝えているが、このようなりズムカルな唱えが中世まで溯るかは不明で、民俗芸能にみる大念仏のほとんどは六斎念仏にみるような長く引き伸ばす引声念仏の面影を残している。

(注13) 「奈良県の念仏芸能」参照

(注14) 埼玉県・東京三多摩地区については小峰孝男が精力的に調査を進めている。小峰孝男 2012『民俗芸能としての双盤念仏』東村山ふるさと歴史館「所沢の双盤念仏」1987『所沢市史研究』No.11所沢市史編さん室 福持昌之 2013/6/15発表「真如堂における十夜法要と双盤念仏」『宗教と社会』学会

(注15) 「神奈川県の大盤念仏」参照

(注16) 大森恵子 1992『念仏芸能と御霊信仰』名著出版 2011『踊り念仏の風流化と勸進型』岩田書院
五来 重 1980「融通念仏縁起と勸進」では放下・暮露等の放浪芸人が融通念仏に集まっていることが述べられている。

(注17) 坂本 要 2011「三信遠大念仏の構成と所作」2013「伊勢・志摩大念仏と傘ブク」

(注18) 坂本 要 2013「上伊那の小正月と夏祭りの行事－傘ほこと囃し言葉－」

五来重念仏関係主要著書・論文

- 1957年 融通念仏・大念仏および六斎念仏『大谷大学研究年報』10 大谷学会
民俗的念仏の系譜『印度学仏教学研究』5-2日本印度学仏教学会
- 1959年 念仏の芸能化について『印度学仏教学研究』7-2日本印度学仏教学会
- 1960年 一遍と高野・熊野および踊り念仏『日本絵巻物全集』10「一遍聖絵」角川書店

- 1961年 一遍と融通念仏『大谷学報』41-1大谷学
会
伊勢三日市の「おんない」と真宗高田派の大
念仏
一遍上人と法燈国師『印度学仏教学研究』
9-2日本印度学仏教学会
農耕儀礼と念仏『宗教研究』34-3日本宗教
学会
念仏芸能の成立過程とその諸類型『大谷大学
研究年報』12大谷学会
1962年 日本仏教民俗学論攷〔博士論文〕
1965年 『高野聖』角川書店
1966年 念仏芸能の系譜『まつり』11まつり同好
会
踊念仏から念仏踊へ『国語と国文学』43-10
至文堂
1970年 風流の踊り『日本の古典芸能』6舞踊
平凡社
1972年 『日本庶民生活史料集成』17 民間芸能
三一書房
1975年 踊り念仏『月刊百科』148～163→1988年
『踊り念仏』平凡社
1978年 真如堂十夜念仏と十日夜『茶道雑誌』43-
10河原書店
1979年 融通念仏と六斎念仏『講座日本の民俗宗
教』6 宗教民俗芸能 弘文堂
1980年 融通念仏縁起と勸進『新修日本絵巻物全
集 別巻1 弘法大師傳絵巻 融通念仏縁起絵
椋峯寺建立修行縁起』角川書店
1989年 『日本人の仏教史』角川書店

坂本要念仏関連著作目録

念仏講

- 1975年 利根川流域における念仏行事の分析『仏
教民俗研究』No.1 仏教民俗研究会
1975年 題目講・念仏講および子安講『日蓮宗の
諸問題』雄山閣
1977年 祖先崇拜と葬式念仏『日本仏教』No.41日
本仏教学会
1979年 (再掲)『葬制墓制研究集成第3巻』名著

出版

- 1977年 上州嬭恋村女人念仏講『歴史地理教育』
No.268歴史教育者協議会
1978年 民間念仏和讃と安産祈願『浄土宗の諸問
題』雄山閣
1979年 六座念仏の講と行事『社会人類学年報』
No.5 東京都立大学社会人類学会
1975年 『勝田市史 民俗篇』茨城県勝田市史編纂
室
1975年 『佐野市史 民俗篇』栃木県佐野市史編纂
室
1989年 『印旛村史 通史編2』千葉県印旛郡印旛
村史編纂委員会
1998年 『大栄町史 民俗編』千葉県大栄町町史編
纂室

双盤念仏

- 1979年 『大田区の文化財 郷土芸能』東京都大田
区教育委員会
1980年 東京の双盤念仏『史誌』No.14大田区史編
纂室
1986年 『浄真寺文化財総合調査報告書』東京都世
田谷区教育委員会
1983年 『大師河原の民俗』神奈川県川崎市教育委
員会
1990年 『東京都双盤念仏調査報告』東京都教育委
員会
1991年 『川崎市史 別編 民俗』神奈川県川崎市
史編纂室
2002年 上和田の双盤念仏『大和市史研究』28 神
奈川県大和市総務部総務課
2014年 神奈川県の双盤念仏『民俗学論叢』29

六斎念仏

- 2004年 若狭の六斎と念仏『まつり』No.66まつり
同好会
2006年 平戸・壱岐の六斎念仏 圭室文雄編『日
本人の宗教と庶民信仰』吉川弘文館
2004年 富士山周辺の祈祷六斎念仏(1)『儀礼文
化』No.34儀礼文化学会
2005年 富士山周辺の祈祷六斎念仏(2)『儀礼文
化』No.36儀礼文化学会

2014年 奈良県の念仏芸能（六斎念仏・双盤念仏）

『奈良県の民俗芸能』奈良県教育委員会

三信遠大念仏・風流踊り系念仏踊り

1988年 遠州大念仏『国文学解釈と鑑賞』No.683
第53-5号 至文堂

1995年 西浦の大念仏と五方『東京家政学院筑波短期大学紀要』No.5

1996年 水窪の大念仏『東京家政学院筑波短期大学紀要』No.6

1997年 三信遠大念仏の五方と弾指『まつり通信』
438まつり同好会

2007年 南信州の念仏踊り・掛け踊りその他『まつり』No.69

2011年 三信遠大念仏の構成と所作『民俗芸能研究』No.50民俗芸能学会

2011年「奈良県十津川村の大踊り」から見た盆風流『まつり』No.73まつり同好会

知多半島虫供養大念仏・融通念仏系

1997年 知多半島の虫供養大念仏と真宗和讃（1）
『東京家政学院筑波女子大学紀要 No.1

2000年 知多半島の虫供養大念仏と真宗和讃（2）
『東京家政学院筑波女子大学紀要』No.4

2012年 知多半島の虫供養大念仏と真宗和讃（3）
『筑波学院大学紀要』No.7

伊勢志摩大念仏

2013年 伊勢・志摩大念仏と傘ブク『年報月曜ゼミナール』No.5 発行月曜ゼミナール

傘ブク・傘を出す盆踊り

2013年 上伊那の小正月と夏祭りの行事-傘ほこ
と囃し言葉-『上伊那の祭りと行事30選 解説書』
ヴィジュアルフォークロア

2010年 山根願正寺の盆踊りを見て『山根ニュース（鳥取県鳥取市）』No.90山根公民館文化
広報部

念仏論

1992年 「念仏=呪術論」再考『仏教民俗学体系第
8巻』名著出版

2008年 日本の念仏の三円構造『宗教民俗研究』
No.18 宗教民俗研究会

付表1 民間念仏略年表

	㊦大念仏	㊧百万遍	㊨融通念仏	㊩六斎念仏	㊪双盤念仏
851年 (仁寿元年)					円仁五台山念仏三昧法始修
865年 (貞観7年)					比叡山常行堂で不断念仏を始業
938年 (天慶元年)					空也市井で念仏を唱える
985年 (寛和元年)					源信往生要集を書く
㊦990年 (正暦元年)					奈良超昇寺にて大念仏始まる。
㊧1099年 (康和元年)					四天王寺で百万遍念仏行われる。
㊨1117年 (永久5年)					良忍融通念仏の夢告を受ける。
㊨1132年 (長承元年)					良忍没。
1175年 (安元元年)					法然専修念仏を説き黒谷に移る。
1207年 (承元元年)					専修念仏禁令法然親鸞流刑
㊦1279年 (弘安2年)					道御清凉寺融通念仏会始める。 一遍信濃国小田切で踊り念仏を始める。
㊦1300年 (正安2年)					円覚十万人上人壬生大念仏を修す。
㊨1314年 (正和3年)					「融通念仏縁起絵」製作される。
㊨1321年 (元享元年)					法明上人男山八幡の神勅により融通念仏中興
㊧1331～34年 (元弘年間)					善阿空円知恩寺で百万遍の数珠繰りを行う。
㊦1358年 (正平3年)					「大念仏一結衆」五輪塔碑初見 (奈良県橋本市神野々墓地)
㊪1400年前後					京都真如堂で十夜法要に「引声阿弥陀経・引声念仏」が唱えられる。
㊦1413年 (応永20年)					高野山踊り念仏・高唱念仏禁令
1420年 (応永26年)					京都伏見で盆の念仏風流行われる。(「看聞御記」)
㊨1423年 (応永30年)					「融通念仏縁起絵清凉寺版」完成
㊦1447年 (文安4年)					六斎念仏供養碑初見 (和歌山県海南市下津町)
㊪1495年 (明応4年)					鎌倉光明寺の十夜法要に「引声阿弥陀経・引声念仏」が伝わる。
㊦1504～1520 (永正年間)					京都光福寺六斎念仏総本山の号を得る。
㊪1579年 (天正7年)					安土問答 (楷定念仏開始説)
㊪1615年 (元和元年)					浄土宗元和法度制定
㊦1664年 (寛文4年)					大阪平野「大念仏寺」の号初見
1655年 (寛文5年)					僧侶の念仏講・題目講への関与禁令
㊪1671年 (寛文11年)					関東十八壇林法度 (八王子大善寺十夜)
㊪1687年 (貞享4年)					双盤鉦初見
㊨1689年 (元禄2年)					「融通念仏宗」の語初見
㊪1726年 (享保11年)					鎌倉光明寺「引声阿弥陀経・引声念仏」再興
㊪1745年 (延享22年)					鎌倉光明寺「十夜用事聚」に「双盤・楷定念仏・六字詰」の語
㊦1755年 (宝暦5年)					京都光福寺「六斎支配村方控帖」
㊦1817年 (文化14年)					奈良矢田寺六斎念仏許状 (奈良市大安寺)

付表 2 全国六斎念仏現存一覧表

和歌山県	伊都郡かつらぎ町中伊飯降
	伊都郡九度山町青淵
	橋本市清水
	橋本市野
	(近年かつらぎ町下天野が絶えてしまった)
	日高郡由良町興国寺
	日高郡由良町畑
	旧南部村晩稲 (現みなべ町晩稲)
京都府	京都市内芸能六斎11ヶ所・念仏六斎は3ヶ所
	八木町神田西光寺
	園部町横田西福寺
	旧相楽郡の旧木津町 (現木津川市)
	旧加茂町仏生寺 (現木津川市)
	乙訓郡大山崎町円明寺山寺
	旧船井郡八木町字八木嶋小字神田 (現南丹市八木町八木嶋神田)
滋賀県	大津市栗原 (旧滋賀郡志賀町栗原)
	旧高島郡朽木村針畑 (現高島市朽木針畑地区)
兵庫県	神戸市北区原野
	神戸市北区行原
	吉川町湯谷
大阪府	箕面市白鳥
	箕面市上止止呂美
	高槻市富田清蓮寺
	河内長野市滝畑
	貝塚市三ツ塚
福井県	若狭30ヶ所で、そのうち踊りを伴うものが6ヶ所である
高知県	高岡郡佐川町
	愛媛県北宇和郡津島町下畑地
長崎県	平戸島近辺の鹿町町・的山 (あてやま)・大島・壱岐島・五島小値賀 (おじか) 島にも詠唱型の六斎念仏が10ヶ所ほど残る
山梨県・静岡県・神奈川県	富士山周辺には、祈祷六斎といって修験道儀礼の入った六斎念仏36か所がある
愛知県	常滑市六佐念仏・半田市成岩四遍念仏・乙川虫供養念仏